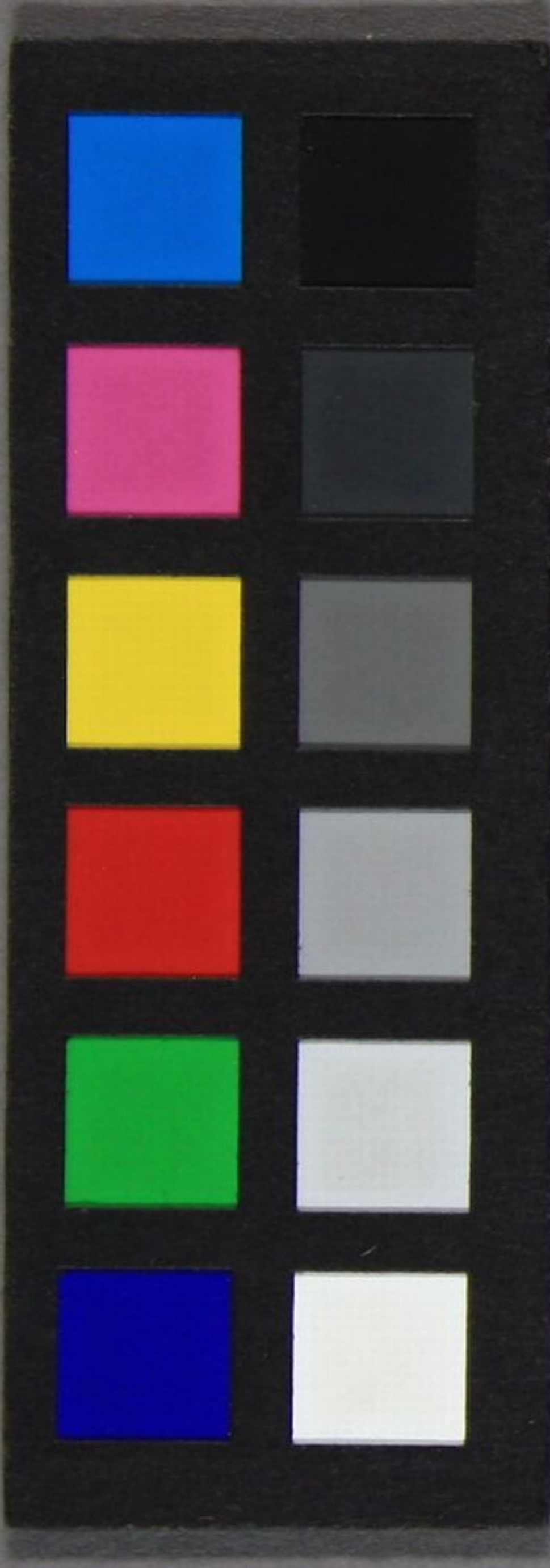


大和田建樹選
新調
唱歌

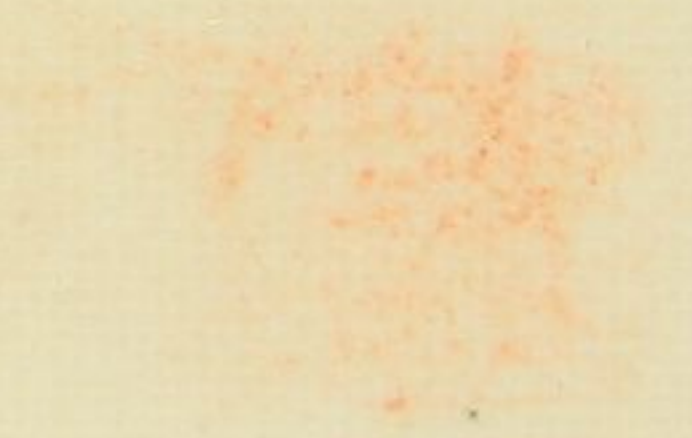
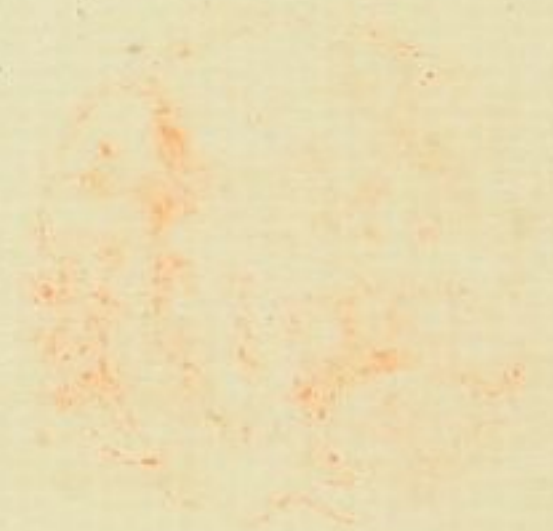
侍人の春

SHIYAN NO HARU.









大和田建樹編輯

新調
唱歌
詩人の春

東京 文盛堂發兌

詩人の春序

人は活物、世は活機、人世萬事動いて止まず、進むもあれば退くもあるは、これぞ自然の道理なるが、進み行くは常に、蟹の横這、跳ね馬の跡、さりは、變とこそ云ふ可けれ、されば近頃世上にて、改良の論やかましく、文字や衣服や芝居や家屋や、進んでは人種までも改良漸の頻なるは、全く時運のここに至れるのみ亦喜ばしき事なるに、獨り詩歌のみ昔のまゝにて置かるべき、先

序

まよ、山尚今巽軒の諸先醒、新體詩抄の著ありて、斯道を改良するの先鞭を振り擧げられしより以来、調子變はりの名作ひきまきらず現はれ出で、寒村僻地の隅々にもろの聲を聴くに至りしは、實に盛んなる事に分ある、吾儕二三者も亦その聲に倣ひて、改良論者たるのみに安んぜず、敢て改良家たらんとすれども、言ふは易く行ふは難く、易きを捨て、難きを取るは、大膽とや云はん生意氣とや云はん、されど苟も幸に活物と

生まをながら、舊きとのみ守りて、新しきに就かざるは死人同様、これまた活世界の罪人なりと思案を定め、つゝと飛び出したは飛出したもの、眼ある者は横這とも見ん跡すさりとも見ん、そこで呼蟹呼馬任他評と、無ねて覺悟を極めこんで、詩人の春は過ぎ去りて、花の名残は消え失するとも、更はりて出づる夏の若葉、秋の千草、冬の銀世界と、時節を追ふていよく新たに、いよく美事なる、造化にはあらぬ作家の御手際

拜見と片唾を吞んで待ちかまふるになん、

明治二十年九月下浣

筠莊居士 和田垣鯨三 誌

詩人の春序

支那の古詩體は平仄の用ひ方韻の踏み方句の
長短等規則は確と備はまども變化稍や自由よて
或は泰西の歌を譯し或は近時の情を述ぶるよは
律や絶句の窮屈にて字數に制せらるゝが如き憂
なれば之を採りて用ひんも便利なるべけれど
支那語もやはり外國語にて本邦人には其正音を
解するもの甚だ多からざれば折角辛苦して四角
四面のむつかしき字を併べ立てゝも目を慰むる

序

功ころあれ耳を樂しませ能く至りては實に稀なり。此くては詩歌を作るの本意も戻るべきなり。また我國從來の歌を考ふるに三十一字や今様は支那の絶句の如く字數少なく共に其言葉と句法とはおもに千年以上のももの拘泥して變化を許さず故に其不都合は彼の陳腐漢文と異なる所殆ど無し。されば當世の情を謡ひまた文明の聲を放たんとするよりは到底自由な當世の語を用ひ之に適する新工夫を爲し歐米の長と我國の粹と

(は所謂國學者流の粹に非ず)を合はして誰の耳にも入り易く誰の心にも解し易き歌や詩を創造するに若くは無かるべし。是れ自らも其未熟を慚ぢずして同感者の驥尾に付き試に兩三篇を綴りて此冊子に加へたる所以なり。さて此冊子と詩人の春と題したるは蓋し名人達士の陸續として其勞と取り夏となり秋となりて我國の維新詩歌と大成するあらんと望むの意なりといふ。

明治廿年七月下旬

國府寺 新作 識

序

こが國のうた、上古は字句のかずは定限なく、變化自在にて、雄壯なるもの、優美なるもの、おのくその思想によりて、長短をことにし、奈良の朝のころにいたりて、もつとも盛んに、人曆、赤人、憶良、家持などのひとびとついでおこり、思想も體裁もやゝそなはらんとせしを、延曆の遷都ありしよりのち、やうやうに三十一字の一體にのみ歸しはて、延喜天曆のさかんなりしにも、た

れ一人、世が一世の腕をふるうて、すたりゆく長歌をおこし、また新機軸といだして世が一家の體をよみはじめんとするものなかりしは、漢文よ泥酔せし世の中とはいへ、いかにあやしむべきとならずや。

ろれよりのちは、まして、歌といへば、三十一字の外なきもの、如くなりて、またおこるべき機運もあかりしと、徳川氏の時にいたり、契沖、真淵、宣長などいでて、古風の長歌をおこし、世を靡おせ

しは、その功すくなからねど、をしいかな、たゞいふしへをいたひ、いにしへに立ちかへさんの精神にのみいでたれば、そのつくるところの歌は、いはば、世が思想をあらはすよりも、むしろ古人の思想とこそいろとを、口まねして演ずるよすぎざりしといはんも、過言ならざるべし。

しかるに、天保、弘化のころ、遊翁、守部などいふ人いでて、世の長歌作者に反對してみづから一家をなし、共に長歌を奨励はしたれど、なほ古人の

範圍内をいづる能はざりしが、近きころ神名川に辨玉といふ僧ありて、これらの事に感慨せしか、専ら近調風の長歌に力をいれたり。されどこれもあり極度よはしりすぎて、思想も言語も野鄙よすぐる事おほく、反面には構句眼中よ萬葉の外なければ、なほ自家新製の體ともいひがたかりき。これはその人の力なきにあらずして、時のなほ来らざりしにもありしならん。これわが國、長歌沿革の大略なり。

近きころは、西洋の思想日々よ入りこみて、詩歌もやゝ面目をあらためんとする勢あり。あるひはわが國の歌に押韻なしとて、かれに習はんといふもあれむ、ペルソニフケーションのかれに富めるところやむもありて、おのづからかの古體の簡單淡泊なるものをばおきて、この精密富麗の新空氣に向はんとするは、人情のまぬかれぬところ、且が國、文學の風潮と未來に卜するよ足るべし。このころ、親友の作れる詩歌を、且が草

詩人の春

詩人の春 初篇目録

心の若き時……………國府寺 新作

水……………大和田 建樹

初蝶……………國府寺 新作

薔薇の君……………谷村 吉男

螢狩……………大和田 建樹

秋の歌……………橘 花子

秋の林……………谷村 吉男

雪……………橘 花子

稿にあはせて出版せんとす。書肆のもめは、す
なはち世人の心なるべきか。

明治廿年七月廿三日朝顔垣に對して

大和田 建樹 するす

春の人の詩

あの人……………	谷村	吉男
戀の日送り……………	妹尾	求
春の月……………	大和田	建樹
夕立の歌……………	谷村	吉男
夕暮……………	大和田	建樹
戀しきわが屋……………	國府寺	新作
農夫……………	大和田	建樹
暴風の歌……………	谷村	吉男
卒業生を送る……………	谷	みち子

春の人の詩

妹の影……………	大和田	建樹
流人燕の歌……………	和田垣	謙三
小川……………	國府寺	新作
教會びらきの歌……………	同	
大洋……………	大和田	建樹
小説の君……………	同	
許由の歌……………	國府寺	新作
友人を送る……………	鷺山	裁櫻
義虎……………	和田垣	謙三

春の人の詩

らいんの守……………國府寺 新作

四

春の人の詩

新調唱歌詩人の春

東京 大和田建樹選

○心の若き時(英詩意譯) 國府寺 新作

あはれ ころの わかまき 時

すぐる 月日 の おもしろさ。

登る に 高さ くま も なく

踏みゆく 道 は いづかた も

つねに たのしき 花ざかり

夜も 晝間の こゝち ー て。

心の若き時

一

春の人詩

されど こころ心の 老いぬれば

ふみゆく 足も たよくと

くる 日 ひ 樂 たのしく あらばこそ。

ひかりも つやも 急がほさへ

たらざる 胸 むね は 雲 くもけむり

身 み には 友 とも なき ことちして。

あわれ ことろの わかき 時 とき

そらは のどかに はれわたる

ながむる 目 め には 霧 きり もなし。

のぼる 朝日 あさひ と もろどもに

うれしき こと は 湧 わきいでぬ

いつも 春日 はるび の ことち して。

されど ことろの 老いぬれば

日 ひ あしも はやく 暮 くれゆきて

ろらに たゞよふ 津雲 うきぐも の

いのちの 舟 ふね は ことづかれ

心の若き時

春の人詩

しるしの星も影きえぬ
網もきれたるこちして。

よしやころは老いぬとも

天つ御國の神づかひ

たのしき言葉をつたへきぬ。

老は墓場にうづもれて

のこるころはもと此春

いつもつきせぬ花ざかり。

○水

大和田 建樹

あろべ あろべ 春の水

氷の間より夢さめて

はしる あゆみの さむやかさ。

梅も 櫻も 汝が胸を

愛して 顔と うつつすらん。

霞にねむる 遠山の

かげをのせて ず 謡ひゆく。

水

春の人詩

うたへ うたへ はる の 水。

をどれ をどれ 夏の 水。

いちご の 下葉 あらひ つゝ

よもぎ の もと に 見かれ つゝ

怒る 日かげ をよそに見て

草はら ふかく ゆく ほど よ

すゞしき 風 も さそひき ぬ。

よごらぬ 月 も やどしき ぬ。

うたへ をどれ 夏の 水。

めぐれ めぐれ 秋 の 水。

まねく すゝき の 袖 よ ふれ

たるゝ 稻穂 の 髪 を うち

たのしき 朝 も うき 夜は も

かたらふ 友 は 風 ひどり

くるみ ながるゝ やまがは よ

たゝすむ くれ や いかならん。

水

春の人詩

春の人詩

なほ 旅たび めぐれ 秋あき の 水みづ。

やすめ やすめ 冬ふゆ の 水みづ

ひとつら 白しろき 野邊のべ の たち

また 舞まひあそぶ 影かげ も なし。

老たい たる 草くさ の かしら には

霜しも のみ こりて 日ひ も 寒さむし。

いざや 岩根いはね に まくらして

未み来らい の 春はる を せめ に まで。

しづかに ねむれ 冬ふゆ の 水みづ。

春の人詩

○初蝶 (英詩意譯) 國府寺 新作

夜よ は ほのぼのと 明あけはなれ

そよ吹ふく 東風こち も こゝちよし。

緑みどり の 森もり や くさむら に

なゝめに よほふ 朝日あさひ かげ。

霞かすみ か 霽もや か たなびく は。

春の人詩

玉たまか 真珠しんじゆか きらめく は。
 さつと 降り来ふりきて はや 晴はるゝ
 小雨こさめも 花はなにかをる なり。
 四方よもの 木この 葉はも 花はな瓣びらも
 露つゆと あざらぬ 物ものなき。
 時ときを 待まち得いて うぐひすも
 心こころ ゆたか に 聲こゑながく
 木深こぶかき 谷たにや 山やまかげ ふ
 ひゞき かへし て 謡うたふ なり。

春の人詩

をりしも 野のべよ 生うまれで て
 光ひかり 見みる 春はるの 魂たま
 かゞやく 羽はねを うちひろげ
 飛とびがまへ する その 胡蝶こてふ。
 母ははの 苦く勞らうは つゆ 知しらず
 まだ ちのみ兒ごの 苦くも しらす。
 たゞ 春風はるかぜに 誘さうはれ て
 たちまち よそふ この 姿すがた。
 かく やさしき この 姿すがた。

春の人詩

虹にじの七色なないろ そめいだし
 金こかねの星ほしを きらめか
 ふるへる羽はねと ひろげ つゝ
 うれしさ 身みにや あまるらん。
 飛とばんと すれど まだ とばす。
 春はるの光ひかりに はげまされ
 清きよき 一ひとづくよ 喉のど しめし
 又 みかへれ ば さて も わが
 身みの うつくしさ 奇麗きれいさ と

春の人詩

繡ぬいも かゞやく 左右さう 此こゝ はね
 かりあはせ つゝ ためし見 て
 いで や これ より 舟出ふなで せん。
 空そらの海路うみぢを こぞわたり
 たゞ 春風はるかぜと たより にて
 なれぬ 舟路ふなぢも おそれ なく
 ゆけよ てふてふ 野のべ とほく
 春はるの あそびを 身みに 盡つくせ。
 夏なつの 愉快ゆくわいを 身みに つくせ。

春の人詩

秋あき くるまはまてはまこやかに
薔薇ばら にしたる露つゆ もすへ。
百合ゆり の蕾つぼみ もひらかせよ。
花はな より花はな とたづねゆき
むくげの蜜みつ も吸すひつくせ。
さらばゆけゆけてふてふよ。

○薔薇の君 (英詩抄譯) 谷村 吉男

春の人詩

一づ一づ 閉ひらくばらの君
みる目もまよふばかりなり。
きよくかはゆきいろすがた
造化ざうくわ の鏡かみ にうつすらん。
ふるればなやむとげあれど
いとやはらかにさきいでて
百媚ひやくび そなはる笑顔えんごこそ
天てん のそだていろか
手折たをりてつけんわが胸むねに。

薔薇の君

春の人詩

ほこり みち たる こゝろ にも
のせて 見たきは 君 ぞ かし。
しをれそめ たる 時 とても
愛敬あいぎやう たえぬ その ゑがほ
ながく 桑和そうわ の 花ざかり
かはらぬ 君 の うつくしき。
生き死いしに とともに 起き卧おふしに
君 の 如く に ありたや と
戀こひしたはるゝ ばら の 君。

春の人詩

○ほたるがり
あの一いげる もりの かげ より
まらきらと うごく は 露つゆ か。
みる うち に 三みつ 四よつ 二ふたつ。
草葉くさば にも 三みつ 四よつ 五いつつ。
あら すゞい 雫しづく か 露つゆ か。
あら うつくし 玉たま か 花はな か。

大和田 建樹

ほたるがり

春の人の詩

うらにちるあのとらん。
 その籠かごをこちこせ太郎たろう。
 水みづようくあの玉たまとれや。
 この籠かごをわたすが二郎じらう。
 こゝに一つひとうこふる一つひと。
 になすなよあれとびゆくが。
 ほたる、ほたる、そなたよゆくな。

春の人の詩

こゝにき来てわれにかはれよ。
 朝夕あさゆふに草くさつみいれて
 いつまでも友ともと睦むつばん。
 母上ははうへの針はりばこてらせ。
 父上ちちうへのまくらべてらせ。
 ほたる、ほたる、いざ家いへいなん。
 夜よもふけぬ。すゞしくなりぬ。
 ほたる、ほたる、家いへにかへらば

ほたるがり

春の人詩

父母ちちははに ともして みせよ。
めづらし や やみ夜よの 光ひかり。
いつまで も ともせよ ほたる。

○秋

(英詩意譯)

橘 花子

かなしき 時ときは 来きたり けり。
さびしき 時ときは 来きたり けり。
森もりは 衣ころもを 失うしなひ てる。

春の人詩

風かぜは 木この間まに 嘆なげく なり。
野のも 黄きばみゆき 山やまも 枯かれ
嵐あらしよ たへぬ もみぢ葉はは
吹ふきくる ごとに まひ散ちり てる
鹿しかの 足痕あしあと うづむ なり。
凹くぼめる 森もりの したかげ も
落葉おちばの 丘かと 變かはり ゆき
よろづの ものもの うたふ 聲こゑ
虫むしの 音ね ならで あとも なし。

春の人詩

○秋の林 (英詩意譯) 谷村 吉男
くだもの 寶る 秋は きぬ。
熱からず して 暖かに
かゞやきわたる 太陽は
旅の車 を 急がせて
日は 目に見えて 縮みゆき
光は いやゝ 弱り 行く。

春の人詩

いまこそ 時と 霜ひとり
ますく つよく いや いろく
緑の 森は たちまちに
金の 花を 開かせて
錦の 旗を ひるがへし
血しほに そまる 色すぞし。
けしき 氣高く こゝろよく
晴れたる 空の 面白さ。

秋の林

春の人の詩

氣きも すみわたたり いさぎよし。
 木の芽こめ やしなふ 春はるの日は
 げに 愛あいらしき 幼こ児なごを
 抱いだける 心こころする なれど
 秋あきは さながら 大人たいじん此
 ほまれ に 誇ほこる さま ありて
 愛めづる 我等われらは おのづから
 名めい士しに 遇あへる 思おもひあり。
 これよ 向むかへば 奮ふん然ぜんと
 氣きも ひき立ちて 愉ゆ快かいなり。

春の人の詩

このよき 時ときに あひたれ ば
 きまよ 秋あきを 樂たのしまん。
 落おち葉ばの 外ほかふ 音ねも せぬ
 静しづけき 森もりに さまよひて
 ひとり そゞろに 慰なぐさまん。
 この 閑かん静せいを 妨さまたぐる
 人ひとの 訪まひくる 事ことも なし。

秋の林

春の人の詩

木の根こねに腰こしと
うちかけて
心をこころしづめ
目をめ閉ぢとて
自然しぜんの物ものの道理だうりをば
ひとり考へ
たのしまん。
ひとりまなび
てたのしまん。

○雪 (英詩意譯)

わがわたが傍かたはらに坐ざを
しめて

橋はし大和田
花子はなこ建樹

原稿
添削

春の人の詩

あれあの庭にはの池いけを見みよ。
見よ一ひとむらの雪雲ゆきぐもは
今いまも上うへに來きかゝりて
くらくしづまる水みづの色いろ。
あれく見よや雪ゆきの花はな
あれちらくくと降りそめて
風かぜにまかせて舞まひくだり
ちらりちらりと舞まひ下くだり
くらくよどめる水みづに消きぬ

雪

春の人詩

あと も なし。

いよゝ しまりに 降り来る

薄墨色うすすみいろ の 雲くも を いで

風かぜ に まかせ て あそぶ あり。

急ぎいそぎ とびゆく もの も あり。

霞ひょうろく か 霞あられ か ちる 花はな か。

あるひは はやく また 遅くおそく

道みち こそ ちがへ 池水いけみづ に

落ち遇ふおちあ 末すえ は 異ならずこと。

ちらり ちらりと たえま なく

暗くくら よどめる 水みづ に とけ

あと も なし。

あゝ あの 雪ゆき の 幾片いくひら は

いま あの 雲くも よ 生まれ 出で

風かぜ よ たはむれ 下りゆくくだ。

金かね や おつる。 玉たま や ちる。

雪

春の人詩

春の人詩

晴れわたる夜の
大空に

きらめく
加すの
星なるか。

大きく
目だつ
雪花も

静まる
水を
わが家と

心いそしく
よろこび
て

くらく
よどめる
水に入り

あと
も
なし。

暗く
氷り
て
光なき

雲に
生まれ
て
とるく
に

軽き
羽も
て
とびまはる

あの
雪花は
むつまじく

手と
とりかはし
うちつれ
て

急がぬ
旅か
ちどり足。

心へだてぬ
友どち
か。

二世を
ちぎれる
婦と夫か。

ちらり
ちらりと
うちつれ
て

くらく
よどめる
水に
落ち

雪

春の人詩

あと
も
なし。

見^みよはげしくも降りだしぬ。

音^ねなき瀧^{たき}の雲間^{くもま}より

風^{かぜ}さへ白く染^そむるなり。

雪花^{ゆきばな}いまは見え分かす

いそぎにいそぎふり下^{くだ}る。

あゝあはれなる雪花^{ゆきばな}よ。

などてせはしく池水^{いけみづ}の

おのが墓場^{はかば}へいそぐらん。

ちらりちらりとすきまなく

くらくよどめる水^{みづ}に死^しに

あと
も
なし。

春の人詩

君^{きみ}がやさしき眼光^{まなざし}も

いまは涙^{なみだ}にうるむなり。

ふりてきぬゆく雪^{ゆき}ゆゑに

ともにあはれを催^{もよほ}しぬ。

雪

春の人の詩

昔むかしの友ともはあらず多くおほく

得はがたき玉たまとたのみしも

いまは草葉くさばに眠ねむるなり。

あはき常つねなき雪ゆきの花はな

ちらりちらりとみなとるよ

くらくよどめる水みづに失うせ

あともなし。

かくいふうちよあれ見よや。

雲くもはやうくはれそめて

かすかにてらすうす日ひかげ

池いけはみどりの色いろ深く

雲くもは山やまへとかへりゆく。

見みよきらきらすさす光ひかり。

いまはのありの色いろもなし。

雲くもと水みづとはきれはなれ

ちらりちらりと降り終おはり

しづかに澄すめる水みづとなり

雪

春の人の詩

春の人詩

あともなし。

○あの人

松本 操

まぬ とりあげ て 一針ひとはり と

縫ぬひ も はてぬ に 思案顔しあんがほ

大事だいじ に はめー この 指環ゆびわ。

飾かざり の 石いし の かたき より

かたく 契ちぎりし あの人 と

親おや の ゆるし で とりかはし

いのち よ 代かふる この 寶たから。

うれしや あの人 三年さんねん の

留學りうがく 期限きげん も はや すでよ

二年にねん あまり も うちすぎ て

のこる 月日つきひ も すくなきに

たゞ 氣きがかり は あの人 の

おとづれ たえし こと のみ ぞ。

もしや ぱりす の 花 を 見て

あの人

春の人詩

春の人詩

ふらんす風ふうに氣きもなびき
 それゆゑおとづれた江たるか。
 または名にれふべるりんの
 しふれい川かはの水みづよ酔よひ
 といつ主義しゆぎに深ちそすぎて
 親おやも故郷こきやうも妾せふが身みも
 自身じしんとともにと忘れし加。
 あゝかなしやなこのわが身
 どうしてかうして居をられうあ。

春の人詩

きぬうちまててつくづくと
 思し案あんの上うへよまた思し案あん。
 かさなるおもひはれりたり
 顔かほにのぼりし一笑ひとえみは
 こゝろのうれしさ知られたり。
 かねて契ちぎりしあの人ひとの
 こゝにおはせしその時ときは
 才徳さいとくもとよりの無備けんびして
 技藝ぎげいに長ちやうじ身持みもちよく
 あの人

春の人の詩

萬事ばんじ

諸人しよにん

よ

うちまさり

若きわか

に

似あはぬに

こゝろ意氣いき

留學りうがく

れほせつけらるゝ

いぜんに

をでに

わが

父ちち

の

目鏡めがね

に

かなひし

あの人が

たとひ

萬里ばんり

のほかにゐて

いかな

まよひ

にであふ

とも

よもや

妾せま

をば

わする

まじ。

よもや

ちかひ

を

やぶる

まじ。

春の人の詩

あの人

たゞ

おとづれ

の

すくなき

は

才さい

の

上うへにも

才さい

を

とぞ

徳とく

の

上うへにも

徳とく

と

ます

勉強べんきやう

一事いちじ

よ

身

を

ゆだね

いとま

の

なきが

ため

ならん。

あゝ

理り

も

とかり

氣き

もすんだ。

これ

で

しごと

も

はかが

ゆく。

もう

一針ひとはり

で

この

きもの

縫ぬうて

しまうて

また

ひとつ

春の人の詩

かすかず かさなる 身の にしき
きて ふるさとに かへりくる
あの 人と 待つ 用意 せん。
またも 手 ぶ とる 針 と きぬ
しごと に かゝる うれしき は
天 にも のぼる こゝち かな。

○戀の日送り(獨詩擬作) 妹尾 求

春の人の詩

朝 来きて 神を 拜むと もろとも
おもひ ぢ いづる たゞ ひとつ
君 の こと のみ まごころに。

玉川 の ながれ 汲みあげ きよらかに
口 を そゝいで まさ おもふ
君 が こゝろ の うつくしさ。

茶 よ そへて 味ふもの の 甘きより

戀の日送り

春の人詩

あまき は ほかの もの ならず
君が 言葉 の いづる 門。

園 に 出 て 手折る 一枝の ばらの 花

見 つゝ ぞ おもふ にこやかに
うち笑む 君 が かほばせ を。

書 とりて 讀まん と すれど はかゆかず
目 に ふるゝ 字 は あちこちと

君 が 姓 名 と つゞり つゝ。

時計 鳴り 晝飯 の うつは そなはれど

胸 に みつる は いつまで も
君 を こがるゝ おもひ のみ。

物 見んと 車 を 市 に はすれども

綺羅 も 錦 も ひかり なし
君 の 肌 と つゝまね ば。

戀の 日送り

春の人詩

野^のにゆきて花^{はな}や霞^{かすみ}をながむれば

またしもれもふわぎなくて

あるにもまさる君^{きみ}の影^{かげ}。

歸^{かへ}りきて湯^ゆあむこゝちはよけれども

なほもまさらん一目^{ひとめ}でも

君^{きみ}の姿^{すがた}にむかひなば。

春の人詩

盃^{ひがしき}を手^てよはとれども飲^のめもせず

酒^{さけ}よ味^{あじ}なし。君^{きみ}なしに

たれとわかたんこの肴^{さかな}。

月影^{つきかげ}は硯^{すずり}てらせと磨^する墨^{すみ}の

いろよつやなし。ゆめうつゝ

なほ書く歌^{うた}は君^{きみ}のこと。

閨^{ねや}に入り樂^{たの}しく寐^ねるは外^{ほか}ならず

戀^{こひ}の日送り

春の人詩

まどろむ 夢ゆめの まくらべよ
君きみが 姿すがたを 見るみばかり。

○春の月

大和田 建樹

薄衣うすぎぬに 顔かほを かくして
ろら高く わたる 少女をとめ子
たれに かく 世よを 忍しのぶらん。
銀色しろがねの 衣きぬの 袖そでより

春の人詩

透すき徹とほる ひかり うつくし。
こぼれ 照てる 笑あはまひ けだかし。
霞かすむ 夜よの 花はなと たづね て
歌うたふ らん 春はるの 調しらべは
童女わらはめの 星ほしこそ 聞きかめ。
輿こし 載のする 雲くもこそ 知らめ。
なつかしき 眉まゆ 烟けむらせ て
川水かはみづの 鏡かみみを のぞく。
君きみが 影かげに ほふ 方かたよは

春の月

春の人詩

風^{かぜ}も たえ 波^{なみ}も なぎ つゝ
 佐保姫^{さほひめ}の 絹蓋^{きぬがさ} さし て
 見えかくれ 君^{きみ}を 送り 送る。
 行く としむ 見えぬ 歩^{あゆ}みよ
 おのづから 生^たひ先^{さき} こもる
 月^{つき}の 少女^{せうじよ}子。

○夕立の歌(英詩意譯)

谷村 吉男

春の人詩

あちこちよき にはかあめ。
 汗^{あせ}は したゝり 目^めは くらみ
 市^{いち}も 小路^{こみち}も 灰^{はい}の 色^{いろ}
 其^{その}時^{とき} さつと 降^ふりくる は
 あらこちよき にはかあめ。
 屋根^{やね}を ばちばち うつ 音^ねは
 蹄^{ひづめ}ろろへ て 踏^ふむ 如^{ごと}く
 注^{そひ}管^びよ あふるゝ 雨^{あま}水^{みづ}は
 推^たし分け^わねぢれ 吹^ふきいだす。

夕立の歌

春の人詩

まどの
硝子戸せらすど
うち
あらひ
流なれも
はやく
巾はぎ
廣ひろく
泥波どろなみ
たて
て
のきいた
の
みず
に
落ちこむ
其そのさま
は
いま
目の前まへの
大河たいが
なり。
病やまひの
床こよ
ふす
人ひとも
かゝる
けしき
を
うちみやり
い
ばい
頭痛づつう
も
わすれ
つゝ

雨あめの
めぐみ
を
謝しやする
なり。

學校がくかう
ひけ
て
かへる
子こ
は

うちつれ
かたり
躁さわぎ
つゝ

こゝの
雨あまたれ
よ
からんと

つけぎの
舟ふねみ帆ほ
を
たて
て

艦隊かんたい
なり
と
浮うけ流ながし

流れ下り
て
其その
は
て
は

手の
ひら
ほど
の
太洋たいやう
の

夕立の歌

春の人詩

春の人詩

波なみにまかれ
てくだくる
と
見みては一度いちど
にとき
の聲こゑ。

畑はたけの畝うね
よたつ
牛うしは

苦くるしき使役しやく
たへ終をはり

軛くびきに屈かみむ頸くび
あげて

廣ひろき鼻はなづら
ひろげつゝ

地ちにたつゆげ
と枯草かれくさに

かとれる風かぜを吸すひしめて

よろこばしげに目めと見みはり

神かみの惠めぐみと謝しやするさま

人ひとの言葉ことばにいやまさる。

此方こなたよ茂しげる樹蔭こかげには

一人ひとりの農夫のうふたゝすみて

田畑たはたいちめん見渡みわたせ

たえまもあらず降ふる雨あめに

作物さくもつ低ひくく屈かみめども

夕立の歌

春の人詩

春の人詩

いや いや これ これ ぞ よ世の中 なか に
己 わの が こ黄金 かね の ふ降る なる と
雨 あめ を をば うらむ こと事 もなく
顔 かほ に こやかに な眺 ながめ をる。

○夕暮

大和田 建樹

遠山寺 とほやまてら

ひゞく かた より くれ そめ て
の かね の こゑ

はや い を こむ る 夕け むり

日 ひ かげ の こさ ず なり よ けり。

ろ びゆる 杉 の えだ 高く

つ ばさ かす め て ゆく 鳥 の

ね ぐら も そこ に しめ つ らん。

わ れ より 外 の かげ も なし。

た な ひき の ある くも ま より

夕暮

五十七

春の人詩

春の人詩

おちくる 星 の うすあかり
神 の ゑがほ の おもかげ か
うみ山 とほく てらしゆく。

海 と 家 なる 舟人 は

たゞ その おほ を しるべ にて
波路 に りぢ を すゝむ らん。

千里 の そら に むかふ らん。

やどりおくるゝ たびびと は

その かげ ばかり たより にて

知らぬ 山路 や たどる らん。

末野 の 里 や たづぬ らん。

焼火 の そば に 繰る 糸 の

ほそき 山家 の なりはひ も

ひと目 ふ 見ゆる 村つゞき

あはれ 身 ふ しむ 夕べ かな。

夕暮

春の人詩

春の人の詩

この夕ぐらのさびしきにつれゆく鴈をかがへつゝ波のあなたに別れこし人れもふ身やいかならん。

春はすだれにちるさくら

夏はのきばにとぶほたる

秋のむら雨冬の月

いづれも思のたねなるを。

春の人の詩

○戀しきわが屋(英詩意譯)國府寺 新作

玉のうてなや歡樂の

世界にうかれあそぶとも

いやしき家もわがすみか

いかでこれにはまさるべき。

わが屋はなれてわが身には

戀しきわが屋

春の人詩

玉たまも 錦にしきも ひかり なし。

われ に 返かへせよ わが 家いへを。

ひくき 草屋くさやの わが 家いへを。

めぐみ あまねき 日ひの ひかり

とが 屋やに われを 照てらす なり。

世界せかい くまなく もとめ ても

ほかに 見みあたる 事こと あらじ。

わが 呼よぶ こゑに こたへ つゝ

さへづる 鳥とりの おもしるさ。

われよ あたへよ、何なによりも

こゝろ やすまる わが 家いへと。

わが 屋やとが 屋や、戀こひしき わが 屋や、

わが 屋やに まさる かたろ なき。

○農夫

大和田 建樹

夜よは あけぬ。朝日あさひのぼり ぬ。

わが 畑はたに いざ 立ちいでん。

農夫

春の人詩

春の人詩

むすめらは 是 歟 どりもちて

子どもらは は 牛 おひつれて

あとさきに くる ず られいま。

いざ いそげ 山の あなたに。

日は そらの なかば になりぬ。

やすみ せん 牛に 草かへ。

湯 わかして て うばも 来にけり。

飯 さげて まごも 来にけり。

露 かわく 草の むしろに

あつまり て ひるいひ たべん。

山のは に 日は かくれ たり。

一うね は あす に のこさん。

子どもら は 鎌 うち すゝげ。

むすめら は 飯器 もてゆけ。

谷川の 小橋 を 来れ ば

かげ 見せて 月 ず かがやく。

農夫

春の人詩

春の人詩

柴しば折をりてうばがたく火と

とりかこみつとふもたのし。

一ひとつきのにごれる酒さけに

朝あさよりのつかれわすれて

肱枕ひぢまくらゆめがしたしむ

おく霜しものふかさもしらで。

あはれわがこれが世よの中なか。

錦にしきをば身みにはまねども

玉器たまけには飯いひはもらねど

うゑもせずこゝえもはてず。

人目ひとめよはつらしとやみん

わが心こころ常につねにやすきを。

春はるされば野のの邊べの雲雀ひばり

わがために歌うたをうたふ。

秋あきくれはかきねのすゝき

農夫

六十七

春の人詩

六十六

春の人詩

わが まへよ 舞まい をみする。
その うたよ 聞きけ ども つきず。
その 舞まいよ 見みれ ども あかす。

天地あめつち に 世よ をまかせて

かく ばかり やすき なか にも

雨あめ ふれ ば 苗なへ や ながれん

風かぜ ふけ ば 穂ほ や こぼれん、と

豊年とよとし を いのる 心こころ の

ひとつ のみ のがれ がたしや。

あはれ 人ひと の 世よ。

春の人詩

○暴風の歌(英詩意譯)

谷村 吉男 原稿
大和田 建樹 添削

鏡かがみ と 澄すめる 川水かはみづ に

映うつれる 橋はし も 面おもて白しろし。

飛とび 行ゆく 虫むし は 見みにね ども

はね の 音ね のみ 残のこる なり。

暴風の歌

春の人の詩

物音 ものねど たえて くれ ちかき

この 時 とき 遠く とほ きこゆる は

家路 いへぢ よ いろぐ 牛 うし の 聲 こゑ

あの 松原 まつばら の かげ ならん。

それ も たちまち やみに けり。

うちひちかけ たる 池水 いけみづ に

咲く 紫 むらさき の 草花 くさばな は

夕日 ゆふひ の 影 かげ を たりかへし

波 なみ は 静けき 水 みづ の 面 おもて

鳥 とり の 去り往く 時 とき の み は

山形 やまがた なりに さゞ波 なみ の

跡 あと と しバー は 残す のこ なり。

水ぎは の 真菰 まこも と きぐに

ふるひ 動く うご は 白鷺 しらさぎ の

立居 たちゐ に さはる ゆゑ やらん。

かく みる ほどよ 画空 にしぞら を

やゝ おほひゆく 雲 くも の 波 なみ

入日 いりひ よ ろみて 端 はし 白く

春の人の詩

春の人詩

まだ 山際やまぎは に 近ちかけれ ど

立ち行ゆく さま は ものすごく

岩いは も さけよ と うつ ごどく

ますく のぼる 足あし はやし。

みるまよ 一天いつてん かきくらし

ほろり ほろりと 降ふりり来きたる

玉たまなす 雨あめ は さながらみ

物ものを うたがふ さま ありて

にはかに 降ふりらず 二ふたつ 三みつ

硝子びらすの まどに ふりかゝり

たるゝ 滴しづく は たてよこに

風かぜの 呼吸いき なほ 静しづかなり。

されど みぎはの 水みづの 輪わは

いま やうやうよ ひろがりて

また たちまちに 亂みだれ つゝ

雨あめの 滴しづくが 太ふとり 来くる。

みるまに つよる いきほひは

春の人詩

暴風の歌

春の人詩

枝はたも折をるべき力ちからなり。

かすかに響ひびく山の端はの

こゑは嵐あらしか雷いかづちあ。

西風にしかせまつとおとしきて

木の葉はの裏うらを翻しるがへし

はらはらはらとなる音ねに

池いけの鷗かもめはおどろきて

いろざわが巢すに立ちかへる。

いよゝ近ちかよる雷らいの音ね。

ますく黯くろむそらのいろ。

疾風はやて一ひともみくるまゝに

池いけに眠ねむりし波なみも

たちまち怒いかり起たきあがり

山やまをおこしてあれたてば

たちまち濁にごる川のかはの色いろ。

色いろ青白あせしろきいなづまに

暴風の歌

春の人詩

春の人の詩

つきくる 雷いかづち すきま なく
 岩いは を つんざく ばかり にて
 雨あめ は 車軸しゃぢく か 矢や ぶすま か。
 黒雲くろくも ひくゝ 地ち に たれ て
 一寸いっすん さき も 見み えわかす。
 今いま まで 見えー 森もり の 木き は
 たちまち かくれ あと も なし。
 雨あめ か 暴風あらし か いかづち か
 耳みみ を つらぬく あの 音ね は。

春の人の詩

瓦かはら ふ かれて 天そら に とび
 大木たいぼく さけ て 枝えだ くるふ。
 たえま も あらぬ いなびかり。
 雨あめ は ますく すきま なく
 風かぜ は いよく ふきまきる。
 あれ はや 風かぜ は ーづまりぬ。
 雷いかづち 死し して 音ね も なく
 見み る まに 雨あめ も 足あし たえて

暴風の歌

春の人詩

のきよ残るは滴のみ
たゞ時々ときどきに音ねがする。

いやいや見よやあれ見よや。
前まへにまさりてたちまちに

またすさまじきこの景色けしき。

雨あめは天うらよりふるさきか。

風かぜは海山うみやまうつ槌つちの。

天地てんちにみつるいなひかり。

鳴る雷いかづちは耳みみの上うへ。

今いまや落ちおちこんいりにせん。

たゆたふうちふ音ね遠く

風かぜはやうくよわりゆき

雨あめも静しずかにふりやみて

天うらををおほへる黒雲くろくもも

次第しだいに白く晴はれ渡り

風かぜは梢こずえよ残るのみ。

暴風の歌

春の人詩

春の人の詩

あゝ 畏ろしき 事 なりき。
今 は わが 胸 落ちつけり。
見よ 見よ 雲の 断えまより
いづしづ 出づる 月の 影
玉 か 鏡 か さえわたり
菖蒲がくれ の 池水 よ
映る 心 も おもしろし。

春の人の詩

○卒業して 学校をいづる 友人を
おくる 谷 みち子

思へ ば はやい あゝ はやい。
三年 の 月日 もろともよ
同じ 学 の 窓 の うち
朝夕 むつび 語らひて
夕ぐれ おそき 春の 日も
いとふけやすき なつ の 夜も
もみぢ の 秋や 雪の 冬

卒業して学校をいづる友人をおくる

春の人の詩

たのしき 時ときも うき 時ときも
 ながさめられ つ、 ながさめ つ、
 たびなる身みをも うちわすれ
 うれしく 君きみと 過すごしけり。
 たのしく 君きみと くらしけり。
 いそぐ 月日つきひに 關せきなくて
 すぎゆく 程ほどは ゆめのま と
 みとせの けふに はや なりぬ。

春の人の詩

けふは としごろ 住すみなれし
 學まなびの やどを たちわかれ
 あまは たびぢに 向むかふなる
 君きみの ゆくへ ぞ したはしき。
 あな したはし や 別わかれては
 今日けふの 圓居まどるを いつか せん。
 たゞ 今いまよりは ふく 風かぜの
 たより につけて かきかはす
 ふみを まつ より 外ほかあらじ。

卒業して學校をいづる友人をおくる

春の人詩

たちわかれゆく わが 友ともよ
 共に はげみし 年月としつきの
 その くるしみを わする なよ。
 浮世うきよの 中なかは 何事なにごとも
 思ふおも まゝ には ならぬもの。
 さり とて 心こころ おくらす な。
 岩いはを る とほす ころろ には
 難かたきも 難かたき 事こと ならず。

春の人詩

たへしのび つゝ つとめ ならば
 的まさの ねらひの はづれん や。
 つとめよ はげめ いざ 友よ。
 譽ほまれの 花はなを 世よに さかす
 時ときを いま より 待ちをらん。
 時ときを いま より たのしまん。

○妹いもだのかげ

大和田 建樹

妹のかげ

春の人詩

ふるさと の わが屋 の 李すも、
このごろ は 大かた 熟うみて
朝夕あさゆふ よ まろびれつらん。
あぢさゐ は さかり や すぎぬ。
若竹わかたけ は いくもと 生たひぬ。
あな なつかし わが ふるさと。
あな こひし わが屋 の かきね。
今いま も なほ 籠かご手てに もちて

春の人詩

梅 の 實 を ひろふ いもとの
おもかげ に みゆる は ゆめか。
目め の 前まへ に かつ は うつゝか。
いざ やきて わが や の にはに
幼いとけなき 時とき の あろび を
もろとも に ふたゝび つがん。
あな うれし いろげ いもと よ。
手習てならひ も けふ は やすみ て

妹のかげ

春の人詩

ならひたる 歌うた くりかへせ。

野のあそびの みちしるべ せよ。

十年とせ さき わが はぜ 釣つりし

川かは尻じり に 小舟せぶね うかべん。

いざ いそげ うつゝ か ゆめ か。

すゞささりし 年月としつき とへ と

こたへ せぬ れもかげ たえ て

のこれる は 涙なみだ と わがみ。

なき人や こゝ に あそびし。

ふる里さと に われ や あそびし。

玉たまづさ 此 けふ は くる か と

わすれ ては いま も まつ なり。

あの とほく まこゆる 鐘かね は

墓はか ふかく 眠ねむり おくりし

そのかみの なごりの 聲こゑ か。

雲くもがくれ ほのめく 星ほし は

妹の かげ

春の人詩

春の人詩

そらよなほたゞよふ魂たまを
しるべきるやみの光ひかりか。
おもかげはやみよもきえず。

あなかなしわがふるさと。

君きみなくてはやいくとせろ。

萩はぎすゝき君きみがすがたを

ゑがきつゝ月つきになびけど

こたへする口くちをばもたじ。

あなかなしわがやのかさね。

あき風かぜはたれをふくらん。

春の人詩

○流人燕の歌 (佛詩意譯) 和田垣 謙三

やよ待まて燕つばめこゝに來きて

しばし翼つばさをやすめよや。

かくよばはれど飛とびこぬか。

われもなんぢもよその人。

流人燕の歌

九十一

九十

春の人詩

さては 身に しむ 秋風あきかぜ に
おどろかされ て 逃げ来こか。
わが 軒下のきした に 巢ねぐへ よや。
われ と なんぢ は 旅たび の 友とも。
あはれ ふびん の わが 友とも よ
たゆたふ なわれ とく きたれ。
とるに 憂うれき 身み を かたるべし。

われも なんぢも 流浪りゆうらうの身。

春の人詩

さはさりながら やよ つばめ
春はるの れどづれ きく とき は
なんぢは こゝを とび去らん。
つばさ なき 身みの かなしさよ。
年とし ふるさとに 立ちかへり
なれし ねぐらに やどるらん。

流人燕の歌

春の人詩

うらやむべきはなんぢが身。
あはれむべきはこの身なり。

○こがは(英人テニソン氏作の譯)國府寺新作

鷺さぎや水鷄くひなのすみかより

にはかよながれはしりて

しだの葉はがくれひかりゆく

谷間たにまをさしていろぎつゝ。

春の人詩

百ちひの小山こやまのろばをすぎ

あるは岩角いはかどうちかすり

千々ちぢぢの村里むらさとそひゆけバ

いく橋々はしはしあくぐるらん。

真砂路まさごちこゑてさままに

かたりさゝやま聲こゑたてて

いり江えに泡あわをうかせつゝ

こがは

春の人の詩

小石さざれのうへに畫えがくなり。

畑はたにそゞぎつ田よ入りつ

萩はぎや薄すゝきのしげりたる

つゝみのもとをうちめぐり

うねりうねりてあゆみゆく。

ゆく道みちすがらさわくくと

大河たほかはさしてすすむなり。

人は行きも一来もすれど

われは行くのみいつまでも。

みぎやひだりにまはるうち

載のせゆく花のうつくしき。

いとすこやかにあちこちと

あそぶ鰐やまめも見みゆるなり。

こがねのさざれうちこえて

こがは

春の人詩

立つ さゞなみに しろがね の

泡あわを そこ ころよ よろほひて

おの が 旅たびぢを かさねゆく。

小柴こしば や 芦あしを うちおほふ

榛はりの 水こがくれ くらりて

「われ わすき な」ど さく 花はなを

うちなびかする 時 も あり。

群むるゝ 燕つばめの ろの 中なかを

かけ つはしり つ ちくほそに

おの が 淺瀬あせに 沈しづむ 日ひの

ひかり をどらす どり も あり。

月星つきほし しろき まよなか に

野のに さゝやく は われ ひとり

おせきの もとに たちどまり

小草こくさの まはり たゆたひ て。

こがは

春の人詩

ふたゝび こゝを 立ちいでて

大河 たほかは さして ながる なり

人は ゆきもしきも すまど

われは ゆくの みいつ までも。

○教會びらきの歌 國府寺 新作

身 み の 罪過 つみとが を のがれんと

御名 みな の 救 すけ を たより にて

つとひあつまる この やから

御陰 みかげ と うけて 榮え さか ゆき

今日 けふ を はじめと 公 たほやけ よ

一群 ひとむれ つくる うれしさ よ。

春の人詩

われに 一つの 功 いさを なし。

搾水 しめぎ の 園 その の 血 ち の 涙 なみだ

鬮體 とくろ の 丘 をか の 血 ち の 雨 あめ も

教會びらきの歌

春の人詩

みなわが罪とあらふため。
御子の功とわれに貸し
すくひたまへやわが罪と。

同胞

れほき

世

にも

なほ

知りて

すくなき

御名

の

徳。

めぐみ

あまねき

わが

父

よ

おろき

こゝろ

を

あはれみて

つどひくる

身を

を

道びきて

て

群

の榮

と

そへたまへ。

春の人詩

○大洋(英人パイロン氏作の譯)大和田 建樹

道

なき

森

にも

樂

あり。

さびしき

濱

にも

樂

あり。

千尋

の

海

み

たつ

波

の

奏する

樂

の

しらべ

にて

人

なき

方

にも

集會

あり。

大洋

百三

百二

春の 人 詩

人 を 愛^めでぬ に あらね とも
 自然^{しぜん} と まし て 愛^めづる なり。
 身^み の 来^こ方^{かた} も 行^ゆく末^{すえ} も
 自然^{しぜん} の 友^{とも} に まじはり て。
 言葉^{ことば} に いひ は つくせね ど
 あまゐる 思^{おもひ} ぢ 忍^{しの}ばれぬ。

さかまけ 千^ち尋^{ひろ} の 青^{あを}海^{うな}原^{はら}。
 一^{いち}萬^{まん}艘^{そう} の ぐんかん も

春の 人 詩

たゞ いたづらに うかびゆく。
 人^{ひと} は 陸^{くわ} をば 荒^あらせ ども
 海^{うみ} には ちから 及^{およ}ぶまじ。
 波^{なみ} の 上^{うへ} なる 難^{なん}船^{せん} も
 みな 汝^な が わぎ の 外^{ほか} ならず。
 人^{ひと} の ちから の 亂^{らん}暴^{ぼう} は
 身^み の ほか 残^{のこ}る あとも なし。
 雨^{あめ} の 去^さづく の ごどく にて
 人^{ひと} に しられず 墓^{はか} も なく

春の人の詩

泡あわだつ 聲こゑと もろ とも
に
汝なが 底そこふかく しづむ なり。

海路うみぢは 人ひとの 跡あとも なし。

人ひとに とらるゝ 地所ちしょも なし。

波なみ躍をどらせ て 人ひとを 拂はらひ

陸くわをば 荒あらす 人力じんりきも

汝なは 戯たはむれ と 視みる ならん。

大おほそら たかく ながさみ に

人ひとを うちあげ 飛とばせ つゝ、

また わが 波なみよ おくる なり。

港みなとめざし て よる 船ふねの

はかなき 願ねがひを のゝり て、

幸さちある 國くにに いざ 行ゆけと

人ひとをば 陸くわに うちあげ つ、

生死しやうじは 人ひとの まゝ に して。

むかふ ところ に 敵かたきなく、

大洋 百七

春の人の詩

進む すむ みなと よ おろれ なく、
 國主 こくしゅ の 肝 きも も 冷ゆる まで
 岩 いは の 岩 そりて も ひゞりせ て、
 人 ひと の 力 ちから に なり ながら
 汝 な が 尊稱 そん「やう を 侵し をか つゝ
 海 うみ の 主宰 しゅさい と 自稱 じしやう せる、
 さし も 巨大 きよだい の 軍艦 かんかん も、
 汝 な が 視る み 目 め には たはむれ にて
 風 かぜ の 雪吹 ふいき に 似 に たる べし。

春の人の詩

とら は ぶ る が る の の 分取 ぶんどり も
 す べ い ん 國 の 艦隊 かんたい も
 汝 な が 底 そこ ふ かく 消え う せ ぬ。
 濱邊 はまべ にも たちし 帝國 ていこく は
 汝 な と の こ し て ぞ 變 かは り ゆく。
 ろ う ま、 ぎ り し や、 あ っ し り や、
 い ま は い かな る 世 の さ ま ぞ。
 自由 じゆう に 富 み し 往昔 わうかみ も、

春の人詩

無道よきだうの君きみのいで一日ひも、
 岸きしは奴隸どれいとなりたるに
 汝なのみはひとり染ちみもせず。
 あどは荒野あれのと成なる世よにも
 面影おもかげかはる事こともなく
 青あをき額ひたいは年月としつきの
 皴しわさへよせず老たいもせず、
 神代かみよのまゝに流ながるなり。

春の人詩

造化ぞうくわの神かみの御姿みすがたを
 嵐あらしにうつすわたつみの
 高大かうだい無邊むへんのます鏡かみ。
 なぎたるゆふべ、はるゝ朝あさ。
 風かぜのふく晝ひるふかぬ夜半よは。
 南北なんぼく極きよくと氷こほらせ
 境さかいもみえずはてもなし。
 變かはらぬ御影みかげの神かみの御坐ござ。
 その水底みなそこの塵ちりからも

大洋

春の人詩

魑魅ちみ 魍魎まうりやう は いでくべく、

諸帝しよたい も なびき したがり。

靈妙れいめう 不思議ふしぎ かざり なく

汝な のみ づ ひどり すゝさゆく。

あな 愛あいらゝ の、 やよ 海うみ よ。

をさなあそび の 樂たのしみ は

汝な が 泡あわ よ 似にて 汝な が 胸むね に

われ も うかされ うかびつゝ、

はしる 事 よて ありし よな。

わ が 身み とさなき 昔むかし より

汝な が 波なみ と ころ あそびたれ。

波なみ づ わ が 身み を なぐさめし。

潮瀬しほせ の 海うみ は さわぐ とも

その おそれこそ 樂たのしけれ。

われは 汝な が子 のこゝちにて

いまの ごとくにいつとて

汝な が 肩かた にもたれかりしよ。

大洋

百十三

百十二

春の人詩

○小説の君

大和田 建樹

花^{はな}

ちりしあとの

春日^{はるび}

を

君^{きみ}

なくばたれと

くらさん。

うちけむり

ふりくる

雨^{あめ}

に

野^の

にいでんこゝろも

たえぬ。

かゝる

時^{とき}

ひぢまくらしして

君^{きみ}

と

かたること

ず

樂^{たの}しき。

ゆきかへり

梢^{こやし}

をつたふ

うぐひすの

歌^{うた}

にもあまつ。

池水^{いけみづ}

をかすり

とびかふ

つばくらの

舞^{まひ}

にもあまつ。

かゝる

時^{とき}

まじよりにて

君

とかたることずたのしき。

くれかゝるゆふべのそらよ

春の人詩

春の人の詩

二つ

三つ

星

みえそめて

やり水

の

ひゞき

すゞしく

篠すだき

風

が

ふきまぐ。

このひま

もなほ

わかれうー

君が顔

みえず

なるまで

虫

の

聲

きれ

てはつゞき

わたる

鴈

とほく

まこねて

夜

はふけぬ。

世

はしづまりぬ。

ねむらんと

すれ

どねられず。

この時

も

君

にむかへば

君

はなほ

さめてずかたる。

花

もみぢ

さかり

はしばし。

うまぎけ

も

のま

ばつくべし。

なつかしき

少女

と

あそび

むつまじき

友

と

かたる

も

あふはおそくわかれば早きを

小説の君

百十七

春の人の詩

百十六

春の人詩

君きみと加たる愉快ゆくわいは長ながし。

神かみ

にあひ

古人こじん

にむつび

魂たま

あへる

友とも

をも

得たり。

ふね

くるま

かよはぬ

國くに

も

時とき

のまゝ

見み

てかへり

来ぬ。

この

愉快ゆくわい

たれ

か

得させし。

たゞ

君きみ

が

自在じざい

の

力ちから。

死し

にもせず

夢ゆめ

にも

あらで

極樂ごくらく

よ

われ

を

何そばせ

矢や

もとばぬ

かたに

立た

たせて

たゝかひ

のさま

をも

見せつ。

この

愉快ゆくわい

君きみ

が

えさせし

想像さうざう

の

翼つばさ

に

のせて。

時とき

を

得にぬ

人ひと

の

なげき

も

まゝならぬ

戀こひ

のうらみ

も

小説の君

春の人詩

春の人詩

成^なり 成^ならず あはせて づきく。

さまぐ の あはれ 世^よの中^{なか}

われのみか人もかくよと

君^{きみ}と 加たる ひまは ながさむ。

君 こそは 造化^{さうくわ}のこゝろ。

世^よの 人^{ひと}を 撰^{はら}び もてゆき

そこよ また なき 世とつくる

おもいろや うつくしの 世や。

いつ までも そこ ふ ゆきかひ

たのしまん、 君が つばさ に

身^みをば まかせ て。

春の人詩

○瓢挂^{ひょうかけ}樹^{じゆ}一葉^{いちえつ}輕^{かろ}。風^{かぜ}吹^ふ獲^と落^お夜^よ有^あ聲^{こゑ}。不^な若^わ棄^す
之^の夢^{ゆめ}亦^{また}清^{きよ}。天^{てん}下^か非^ず大^{だい}瓢^{ひょう}非^ず細^こ。身^み外^{がい}之^の物^{もの}總^{すべ}
爲^な累^{るい}と、あれは清人王吉武が許
由瓢と題する詩なり。いまそ

春の人詩

の意を演べて歌を作る。

國府寺 新作

行^けれ たる 耳^みを 洗^{あら}うて さつぱりと
 済^うき世^よの 事^{こと}は 塵^{ちり}ほど も
 わが 潔^{けつぱく}白^{はく}な 精^{せい}神^{しん}を
 犯^{まか}さすまじ と 意^いを 決^{けつ}し
 天^{てん}を 笠^{かさ}とし 地^ちを 床^{ゆか}と
 なんの 氣^きも なく 獨^{どく}歩^ほする。

春の人詩

つれ は ひとりも あらね ども
 腰^{こし}に ぶらつく 歌^{うた}單^{たん}は
 これ ぞ わが 身^みよ ともなう て
 いつしよに 去^さるも よからう と
 いでゆく うちよ 日^ひは 西^{にし}に
 落^たちて ろよく 風^{かぜ} さむく
 たどひ 心^{こころ}は 大^{だい}乘^{じやう}の
 宇^う宙^{ちゆう}を のする 量^{りやう} あれ ど
 こまる は くだらぬ 骨^{ほね}と 肉^{にく}。

春の人詩

疲^{つか}れ て 息^{いき}ひ ねむく なり
 腰^{こし} の へうたん とりおろし
 あたり の 枝^{えだ} に うちかけて
 いびき たかだか 寐^ねる ほどに
 風^{かぜ} は 夜^よ に 入り つよく なり
 瓢^{へう}單^{たん} がらがら 水^み に ふれて
 いびき を 消^けせば 夢^{ゆめ} やぶれ
 ねる に ねられず むつくりと
 立^たつ て 瓢^{へう}單^{たん} もぎとつて

春の人詩

微^み塵^{ちん} に なれ と 投^なげすてつ。
 さても 外^げ界^{かい} の うるさゝよ。
 天^{てん}地^ち もとより 大^{だい} ならず
 加^かれ これ する には およばねど
 瓢^{へう}單^{たん} もとより 小^{せう} ならず
 惜^をしからざる に あらね ども
 ともに うき世 の もの なれ ば
 うちやり きよく ひどねむり。

春の人の詩

○友人某を送る 鷺山栽櫻
 雨が降らうが降るまいが。
 やなぎの枝が靡かうが。
 陽關三調 ふるくさい。
 世界の人はみな故人。
 いたる處の山川も
 かねて知らるゝ土地なれば
 目に觸るゝのははじめでも

春の人の詩

みなふるさとこのちせん。
 烟のとざすあらびや海
 雲の迷ふあふりり洲
 鵬程九萬なんのその
 昔にちがふいまの旅
 瀛船は軽く一片の
 木の葉の如く飛び去りて
 風波いとはずすみ入る
 地中海こそ愉快なれ。

友人某を送る

春の人の詩

岸きしの廻まはりよ跡あとのこす
 ざりしやろうまの古大國こたいこく
 ちよつと眺めながめて興きようを取とり
 漁船ぎせんを下たりて漁車ぎしやに乘のり
 一聲ひとこゑひゞく合圖笛あひづたば
 聞きくどはや見みるぱりの月つき。
 月夜つきよか晝ひるかひるならで
 ひるよもまさる常夜燈じやうやとう
 路みちまよはずようち去りて

春の人の詩

かれいの渡わたりどうむへと
 わたりて早くろんとんよ
 着ついてあんどの知しらせせよ。

○義虎(獨詩意譯)

和田垣 謙三

千里せんりの叢やぶを往來ゆききせし
 虎とらは疲つかれてねむりけり。
 とりしも草葉くさばおしわけて

義虎

春の 人 詩

ひとつ の 大蛇 きろち いできたり

ひま と ねらう て たやすげよ

ねむれる 虎 とら を まきしめつ。

虎 とら は おどろき 目 を さまし

さめ て ますく おどろきぬ。

裂くる 眼 まなこ は いなづま か

あたり も 光り かッやけり。

よばはる 聲 こゑ は いかづち か

峯 みね も 谷間 たにま も ひゃく なり。

大蛇 きろち は ねたり かしこー と

ふたまき みまき まきしめ て

くび きーのバ 舌 した を だし

いまに のまんず けしき なり。

時に 向ふ むか の 樹蔭 こかげ より

武士 ぶし 一騎 いっし いできたる。

おろれ退く しりぞ 馬 うま を すて

義虎

春の 人 詩

春の人詩

えもの

れつとり

立ち向ひ

大蛇をろち

めがけて

きりかゝる。

何なに

かはもつて

たまるべき

二丈にぢやう

にあまる

かの大蛇をろち

一寸いっすんぎり

にきられ

たり。

思おもひがけ

なく

救すくはれ

虎とら

ははじめ

大息たほいき

頭かうべ

を垂たれつ尾おをふりつ

武士ものゝぶ

近く

うずくまり

手てを

しづやかに

ねぶりつゝ

跡あと

をいたひてつきゆけり。

かくて

晝夜あうや

のわかちなく

主従しゅじゆう

のなかとなりけり。

年月

まぎてものゝふは

波路なみぢ

へだつるふるさとに

かへるべき日ひとなりか

義虎

春の人詩

春の人詩

虎とら は つれられ ゆかんとす。
 されど 船子ふなこ は おそれ けん
 ふね に のする を うべなはず。
 日ごろ つきそふ その ぬー に
 わかるゝ 虎 の ふびんさ よ。

船 は みなと を ばやいで ぬ。
 虎は 濱邊はまべ に 吼ほえくるひ
 ぬー を よぶ ぐ と 見に ける が

春の人詩

らいんの守

○らいんの守(獨詩の譯)

國府寺 新作

たちまち 海 に とび入れり
 船の あと に と ねよげ ども
 帆足ほあし は はやく 浪なみたかく
 ぬー を はるかに ながめ つゝ
 身をば 波間なみま よ ーづめ けり。
 波間なみま に 身 をば しづめ けり。

春の人詩

一、嵐あらし

か

浪なみ

か

太刀音たちね

か。

ひゞくは、ひゞくは らいんまで。

どいつの國くにの らいんまで。

まつさき かけて 馳はせむかひ。

川かはを 守まもる はたれなるが。

まもりと なるはたれなるが。

あゝ 親愛しんあいの 父母ふぼの 國くに

しづかに おはせ 安堵あんどして。

らいんの 守もりは 國くにのため

二つ ころを もつべきか。

春の人詩

二、

この 聲こゑ まく より いさみたつ

數萬すまんの 人民じんみん 目を みる

大音だいな あげ て 盟ちかふ やう

わが 愛國あいこくの どのいつ人じん

この 親愛しんあいの 國くにが

まもらで いづくに ひかるべき。

あゝ 親愛しんあいの 父母ふぼの 國くに

らいんの守

春の人詩

三、

一づかに おはせ 安堵あんどして。
 らいんの 守もり は 國くにの ため
 二つふた ころ を もつべき か。
 また 大空たほそら と
 先祖せんぞ の 御靈みたま 拜はいし つゝ
 いさみさけぶ は、 あゝ らいん
 らいん川がは が わが ころ
 といつ の 外ほかの もの ならず。
 うち仰あふぎ

春の人詩

四、

人手ひとて よ など か あたふ べき。
 あゝ 親愛しんあい の 父母ふぼ の 國
 一づかよ おはせ 安堵あんどして。
 らいん の 守もり は 國くにの ため
 二つふた ころ を もつ べき か。
 一ひとしづく でも わが 血ちしほ
 身みを はなれず に ある 内うちは
 片腕かたかひな でも わが からだ

らいんの守

春の人詩

武器

とる

力

ある

内は

敵

一人

も

らいん

より

こなた

の

地

には

わたを

まぐ。

あゝ

親愛

の

父母

の

國

しづかに

おはせ

安堵

して。

らいん

の

守

は

國

の

ため

二つ

こゝろ

と

もつべき

か。

五、
盟

の

聲

は

天

よ

みち

旗

は

嵐

に

うちなびき

おなじ

こゝろ

に

たかだかど

よばはる

こゑ

が

いさましき。

らいん

の

邊

で

らいん

にて

國

を

まもらん

もろともに。

あゝ
親愛

の

父母

の

國

しづかに

おはせ

安堵

して。

らいん

の

守

は

國

の

ため

二つ

こゝろ

を

もつべき

か。

らいんの守

百四十一

春の人詩

明治廿年十月六日版權免許

明治廿年十二月 出版

東京府士族

編輯者 大和田建樹

牛込區市ヶ谷仲之町
四十番地

東京府平民

出版人 酒井清藏

神田區表神保町五番地

英國リトン公原著

日本理學士磯野徳三郎君譯

日本大和田建樹君校閱

英國^{法學士}未松謙澄君序

サクソン

王の名殘

ハロールド物語

正價金四十錢
郵稅金十六錢

本書は有名なるリトン公が事實を古事史に徴し相像を天才に求めて彼のウヰルヤム王一世がサクソン王位を握り之を後世子孫に傳へたる顛末を記したる書にて實末松氏の序文にも云へる如く史外の史を綺文婉詞の間に傳へたるものと云ふべし江湖の諸君之を熟讀翫味せんには啻小説をして其奇妙案よ驚くのみならず世界無比の強國と進化し來れるイギリスは九百年前にありて其人情、風俗、政治、宗教の如何なりしかを知らる由あらん